

連載：研究者になる！－第86回－

人間・環境学研究科・准教授 中筋 朋



●世界各国のパフォーマーとともに演劇三昧

高校時代は病気で運動禁止の時期があったため、体育祭や遠足などの思い出は少ないものの、ピアノに夢中になり必死で練習したり、文化祭には友人とカジノをつくったり、屋内ではエネルギーに過剰に過ごしていた毎日でした。当時はまだ自分の興味と勉強が結びつかず、漠然と認知哲学を学びたいという気持ちで、京都大学文学部へ入学しました。入学後は学生劇団に入り、劇団の活動が開始する18時になってその日はじめて大学に……ということも多々ある、不真面目な学生でした。劇団では、そもそも喋りながら動くということがとても難しく、自分が自分のからだをまったく把握していないことに気づき、その後コンテンポラリーダンスのワークショップに多く参加するようになります。夏休み中、ギリシア、ドイツ、アメリカ、フランスなどさまざまな国の先生に1日中レッスンを受けたり、いっしょにパフォーマンスをつくったり、と非常に贅沢な時間を過ごすこともありました。第二外国語がドイツ語だったのにフランス文学研究室に進んだため、授業で読む文章にいつも手いっぱいでしたが、よき交換パートナーやその友人と過ごすことで新しい言語を身につけていく楽しさを体験することができました。

●哲学、科学……多角的方面から演劇にアプローチ

学部生の頃は、自分がダンスや演劇の世界で体験していることと、大学での勉強をかなり分けて考えていたので、全く違う研究をすることも考えましたが、最終的に、自分がからだ、意識、ことばについて体験したことを考えていくには、ことばを発しているからだと対峙する芸術である演劇について研究するのが一番良いように思えました。また、19世紀末のヨーロッパは、からだと無意識の問題を考えるうえで、おもしろいターニングポイントです。もともとはフランス現代演劇、その後、現代演劇をつくる大きな転換点となった19世紀末の研究へ。人間の脳の仕組みがわかってくると同時に、私たちが「無意識」の影響を強く受けているということも注目されるようになった19世紀末の、「人間の内面の表現はどのようなものになりうるのか、そしてそれを身体で表すとどのようなことになるのか」ということを研究のテーマにしています。このことを考えるには、演劇そのものだけでなく、当時の哲学・科学、そしてそれがどのように生活に働きかけていたかを知ることが必要です。また、演劇作品や文学作品を見るにしても、その芸術的な価値を探るだけでなく、歴史資料として見る視線も重要になります。最近では、人間の思考が、どのように魔術的なものと非魔術的なもののあいだで螺旋を描いてきたかを考えるために、19世紀の小説や戯曲、そして演技実践について考えています。

●大切なのは体感・体験の知。自分のからだで実験し、自分自身をプロデュース

演技というものを通して気がついた「私は自分のからだの操縦が下手である」ということは、日常生活でもいろいろな「生きにくさ」を生んでいます。それに取り組むために、からだにアプローチして、その影響について考え、まわりの人たちともそれを共有していくうちに、大学院生になっていました。芸術を「している」人がまわりに多かったので、「それについて書く」ということには後ろめたさがありましたが、フランス留学でそのように「書く」「話す」ということも芸術と同じ意味でひとつの行為になりうるということがわかり、これをずっと続けていこうと思いい、最終的に研究者になっていました。研究者は、研究をしていくと同時に自分をプロデュースする必要もあります。そのことを大変だと思うより、自由でよいなと思う気質だったことが現実的には大きかったのだと思います。考えてみると、私は「自分のからだで実験すること」が好きなようです。語学でもからだを動かすことでも、頭でわかることと、それができるかどうかは別の問題です。何かについて考えることや書くことは、この違いがわかりにくくなりがちですが、体感としてわかっているかどうかを置き去りにしないようにしています。また、「ニュートラルに、けれども個性的に」ということも心がけています。身体がもっている「個性」と、日常生活の蓄積でできたからだに負担をかける「癖」は大きく異なります。一見個性にも見えるこの「癖」を解放したあとに出てくる「個性」を大事にしたいと考えています。加えて今まで学んできたことをさらに進め、学問として広げていくことができると思いますね。